道者の中を暴れ廻りまして
「さあ〳〵明星の宿へ來ました」
「イヤ面白かつたなア、オイ馬子、此の馬えらいぐれつく馬やなあ」
「ハイ、ちんば馬ぢや」
「ア、、ちんば馬に乘せやがつたんか」
「また歸りにも乘つとくなされや」
「誰が乘るもんか」
「私ら馬に乘つたんやない、馬にもたれて居たんや、モウ少し走つたら横腹を摺り破つて仕舞ふところや」
「併し、こんな事が道中の酒落や」
と三人の者が明星の宿へ泊ります。

（つゞく）

十月の上方咄を聽く會を唄ふ

御津之華社　樂天坊

花柳さんの「浮世根問」
△世界の果まで問詰められて　詰まる長屋の節用集
談枝さんの「生貝」
△男結びに女房の智惠を　借らぬ祝儀の鮑熨斗
松鶴さんの「盜人仲裁」
△悋氣と悋氣を衝突させて　笑ひ包んだ大荷物
米團治さんの「四季の茶屋」
△二本差いても田樂並みに　味噌が足らない田舍武士
麥團治さんの「お文さん」
△乳母の器量に不安の雲が　眉にかゝつた御寮人
花團治さんの「長頭廻し」
△醫者の氣轉が妙藥よりも　利いて芽出度い緣結び
染三さんの「二番煎じ」
△寄れば話しが又酒になり　尻がぬくもる自身番

隨筆

二題

ほんに女房は辛いもの

佐野千代子

秋風とゝもに、障子は貼り替えんならんし、着た切り雀は厭、氣だけでも忙しうなつて來ました。

野崎氏から隨筆を書けとの御意、よう書くと思ふて居やはるのかいな。芋莖の皮でも剝いてる方が性に合ふてますワ。とは云ふものゝ女冥利、「好きなはなしの爲ならば何の惜しからう恥かく位」と厚顏しくも笑はれます。

「これ貼つときや」と父の買ふて來た萬延二年版の〃番附〃で〃女庭訓〃と云ふのがあります。「此番附一枚貼置ば家内和合して家繁昌すべし」と。白は扨ておき黑の方の勸進元は「亭主を尻に敷く女房」張出し大關が「少しお氣の毒、此番附を見て迷惑がる女房」西の大關が「悋氣ぶかい女房」で、まだ其上「何處かしら足らぬ女の智慧袋」

いやもう散々です。